NEWSLETTER No.96
ISSN 1340-5578
TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
The Society for Research in Asiatic Music
January 29, 2016

一般社団法人
東洋音楽学会
会　報
第 96 号

発行　一般社団法人東洋音楽学会
事務所　〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号　TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail : LEN03210@nifty.com　●ホームページ：http://tog.a.la9.jp

目　次

第 66 回大会レポート …… 1
通常理事会・総会議決事項のお知らせ …… 12
学会 80 周年に向けた資料収集についてのお願い …… 12
ICTM（国際伝統音楽学会）に関するお知らせ …… 12
第 33 回田邉尚雄賞アンケートのお願い …… 13
会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ …… 13
東日本支部からのお知らせ …… 13
会員異動 …… 14
図書・資料等の受贈 …… 15
新刊書籍 …… 15
新発売視聴覚資料 …… 17
編集後記 …… 17
第 4 回定時社員総会議事録（抄）・添付書類 …… 18

第 66 回大会レポート

（2015 年 10 月 31 日～11 月 1 日　東京藝術大学）

第 1 日（10 月 31 日）

◇公開講演会「大学における世界音楽の実践」

司会：植村幸生

「日本の大学における世界音楽の実践をめぐって」

植村幸生（東京藝術大学教授）

「日本および海外でのガムランの実践」

皆川厚一（神田外語大学教授）

「越境する日本伝統音楽

―海外の大学カリキュラムにおける雅楽―」

寺内直子（神戸大学教授）

小泉文夫の三十三回忌に因んで行われた本講演会の登壇者は、東京藝大における小泉の後継者、植村幸生氏、日本で約 30 年間に渡りガムランの紹介・演奏・教授に携わってきた皆川厚一氏、そして海外の大学の雅楽実践クラスに携わった経験をもつ寺内直子氏の三名で、それぞれの発表に続き討議が行われた。

植村氏は、小泉が世界音楽実践クラスを東京藝大に導入するに至った経緯を説明し、一般社会でも世界音楽実践が普及している今日、大学プログラムの改革が必要であるとして以下の五つを提案した：1）器楽中心から声楽・舞踊へ（それによる学び方の見直し）、2）多様な授業内容・レベルの確保（アジアへの偏り是正、基礎習得後のフォロー等）、3）国際交流とカリキュラムの接合（国外の提携大学と指導者の相互受け入れ等継続的な互恵システムをつくる）、4）フィールドワークと実践教育の融合（音を取り出して教える教育から、音のコンテクストを学ぶ教育へ）、5）少数民族・少数集団への配慮（アイヌなど国内における人材の活用）。いずれも的を射た提案だが、実現には大学組織の理解が不可欠だろう。世界音楽教育のパイオニアとして、是非藝大でこれらの改革の先陣を切ってほしい。

皆川氏は、合衆国と日本にガムラン団体が多数存在するデータを示すとともに（HP で確認できる範囲で前者 115、後者 26）、日本人にとってのバイミュージカリティーの意味に疑問を投げかけた。多くの日本人にとって西洋音楽が「母語」であるが、特に音大生についてはガムランの音階を西洋音階に読み替えてしまう、楽譜依存からぬけられないなど、その母語における専門教育が音楽的他言語を学ぶうえで弊害にもなりうることが示された。一方、邦楽学習者は口頭伝承に慣れており、記憶力・集中力のコントロールがうまいという。『諸民族の音階』を記したジョン・エリスが、西洋音楽的に訓練された聴覚に対して「ある特殊な音体系で訓練されたに過ぎない聴覚」と言ったことが思い出された。

寺内氏は、UCLA、ハワイ大学、コロムビア大学、ケルン

大学での経験・事例をもとに、大学の世界音楽教育の定着・発展には、推進者（大学サイド）と実技指導者の両アクターがそれぞれの条件や環境に応じて総合的に作用する必要性があることを強調した。そして、聞く音楽からやる音楽へ、やるために調べることへと学生を導くこと、そのインフラとして大学が機能すること、また大学の公開・聴講生受け入れや、高校、地域行政、企業等との連携を通じての社会貢献が、これからの大学に求められることが指摘された。

各発表は非常に興味深かったが、討議の時間がほとんどなく消化不良で終わってしまったのが残念だった。今日の大学の役割を考えたとき、一般社会との差別化（大学にしかできないことをやる）とともに、連携が必要であると感じた。世界音楽に対する関心が一般的に高まり、アクセスも容易になっている今日、質の保証、本格的な学び、という信頼を大学が得ることで、学生を引きつけ、また社会貢献していくことが必要そうだ。　早稲田みな子

◇公開演奏会「大学に響く世界の音楽―東京藝術大学大学院修了者による演奏会―」

司会：増野亜子（東京藝術大学非常勤講師）

演奏：毛丫（中国古箏）、劉丹（中国琵琶）、マキシム・クリコフ（バララライカ）、ウメトバエワ・カリマン（コムズ）、サワン・ジョシ（シタール）

公開講演会に続き、第 6 ホールにて公開演奏会がおこなわれた。

最初に北京出身の毛丫（マオヤ）さんが古箏のダイナミックかつ繊細な演奏を披露し、観衆を圧倒した。つづいて、内モンゴル自治区出身の劉丹さんの華麗な指さばきによる琵琶の演奏、次に、サンクト・ペテルブルク出身のマキシム・クリコフさんが柔らかなバララライカの響きを聴かせた。キルギス出身のウメトバエワ・カリマンさんは、コムズとテミル・コムズで見ても聴いても楽しい演奏を見せてくれた。最後は、カトマンドゥ出身のサワン・ジョシさんがシタールで、逆瀬川健治さんのタブラをともない、愛のラーガ、ジンジョティを手際よく示し、インドの映画音楽を彷彿とさせる軽快な民謡でしめくくった。どの演奏も私の予想を超えた良い演奏で、短時間に数多くの楽器を楽しむことができた。

一番の驚きは、出演者がみな、出身国で音楽家としての訓練を受け、演奏家としても活躍できる実力をもちつつ、東京藝術大学に留学して研究を深め博士号も取得したということだ。その陰には並々ならぬ努力があるに違いない。そのことに称賛を捧げたい。また、日本の芸術大学がこうした人びとに研究の機会を提供していることは喜ばしいことだと考える。

この演奏会が学会に示唆するものも大きいと感じた。この学会には、比較的多くの演奏家が会員として在籍しており、実演と研究が近い位置にある。近年、この点について意識化されることは少なく、学会活動における実演と研究との関係を再考し、深めていくきっかけとなるだろう。さらに、学会の対象が、演奏家や研究者の結びつきに支えられる形で広がっていくことが期待できる。「東洋音楽」という用語の適切性については議論が必要だろうが、研究に加えて、実際の音楽活動の展開からも「東洋音楽」の広がりに実体を与えるものとして、彼らの活動は意義深いと言えるだろう。　福岡正太

◇第 32 回田邉尚雄賞授賞式・受賞祝賀会

第 32 回田邉尚雄賞の受賞者は塚田健一氏で、受賞対象は『アフリカ音楽学の挑戦-伝統と変容の音楽民族誌』であった。授賞式では金城厚選考委員長より受賞理由が述べられ、塚原康子会長より賞状と賞金が授与された。受賞理由として、日本では数少ないアフリカ音楽研究書としての学術的貢献のみならず、民族音楽学の方法論として独自の「挑戦」を展開していること、民族音楽学のアイデンティティとしての音楽分析の復権と総合的音楽民族学を主張することなど、音楽学という学問分野への方法論的展望を示している点などが評価さ

れた、とのことであった。続いて塚田健一氏より挨拶があり、闘病からの著作である旨、短く述べられた。

定時社員総会の後に開催された受賞祝賀会は尾高暁子理事の司会で進められ、塚田氏によるスピーチでは、闘病生活の中で学問研究に関する執筆をすることが生還への道を開いた旨が語られた。また、早稲田みな子氏から祝辞があり、留学時に塚田氏から受けた学問的厳しさと暖かさが語られ、本学会の会長も務められた塚田氏の、アフリカ音楽のみならず音楽学全般への力強さをもった熱意を、出席者一同が感じることとなった。塚田氏の受賞は、本学会員にとって、学問をすることへの畏敬の念とたゆまぬ前進への大きな勇気をいただいたように思われる。なお、今回の祝賀会には若い学会員も多く出席し、世代を越えた交流と学問的刺激にあふれた豊かな会となったのではないかと思う。　永原恵三

第２日（11 月１日）

◇研究発表１ - A

〔共同発表〕

トゥバの楽器文化にみる専門化と国際化

発表者代表：山下正美

発表者：ウメトバエワ・カリマン、

ヴァレンティナ・スズケイ（非会員）

このセッションでは、トゥバ共和国の楽器をめぐる文化を、ソヴィエト連邦時代から現在のロシア連邦の一員となった歴史的経緯を踏まえて、この時代に研究を続けてきた音楽学者のヴァレンティナ・スズケイ氏を招いて、「専門化と国際化」という切り口で考える、という包括的な研究発表の場が形成された。スズケイ氏によるその著書『トゥバの伝統楽器』に基づいた講演ともいうべき啓蒙的な発表が全体の議論の素地となり、そこに二人の若い音楽学者、山下正美氏とウメトバエワ・カリマン氏による現地調査の報告、そして、1990 年代から現地に滞在して演奏家や研究者と交流し、日本に紹介してきた等々力政彦氏の演奏による協力と、同じく直川礼緒氏のフロアからの発言などが加わり、大変豊かな情報と議論の深みが得られたと思われる。

「専門化」という概念が伝統的な音楽文化に課せられた変化は、西洋化、アカデミア化とほぼ同義とする発表者らの調査結果は、その後の「国際化」とともに、伝統音楽が晒されている現実を映し出しているようである。また、山下、ウメトヴァエワ両氏による楽器製作の現場報告では、工房「オヴァー」とサルチャク・ショルバンの二つの事例が示されたが、前者がトゥバ共和国政府の文化行政と結びつく一方で、後者が柔軟に演奏機会の変化に対応するあり方として紹介された。楽器製作といういわばハードの面に着目することによって、「専門化と国際化」という通時的、共時的な変化への実に敏感な対応を見ることができる。そのことは、トゥバにおいていかに楽器文化がそこに住み生活を営んでいる人々のパーソナルな次元からパブリックな次元へと広がりをもって展開されていることを示すことになるのであろう。トゥバだけに完結することのない課題が示唆されていたように思われた。

永原恵三

◇研究発表１ - B（司会：加納マリ）

二代目哥澤土佐の音楽的特徴

木岡史明

木岡氏の発表はうた沢節の特徴つまり「うた沢節らしさ」を探る研究である。氏はＳＰレコードから二代目哥沢土佐の８曲の音源を採り、振り・振切り・押し、以上３種の節回しと頻度を抽出、分析し、清元節や富本節との比較をまじえて考察した。二代目土佐の録音は節回しが安定していること、３種以外にも類型化できる節回しがあること、節回しを軸とした旋律型の分類によって「うた沢節らしさ」が解明されるであろうこと、という３点を氏は述べた。また、土佐以後に節回しは変形され、旋律線が変わったとも述べた。参加者からの「節回しとは旋律型一般か、あるいはこぶしのことか」という質問に対し、こぶしのことだと氏は回答した。

聴聞者から、ち密な分析が科学的でわかりやすいという声があった。また五線譜化でなくグラフ化する方法が、音楽学に利用しやすい時代になったという声もあった。うた沢節の節回しを細かに抽出したのを聞いた体験は、筆者にとって初めてで、節の魅力を強く感じたひとときでもあった。

奥山けい子

戦前の歌舞伎囃子における能管―『黒美寿』―を中心に―

鎌田紗弓

歌舞伎囃子の能管の演奏内容は戦前、一定しない。鎌田氏は能管の技法研究のため戦前の実態を分析する目的で、５世福原百之助著『黒御簾』（1943 年完成）の唱歌を検討し、６世百之助の協力による現行演奏の記録と比較した。氏は１）現行演奏とは３点の違い―①寸法が違う（例：男舞、早舞）②装飾的な音が少ない（例：ヒヒョ→ヒョ）③唱歌のリズムが拍の頭に揃う（例：序ノ舞）　がある、２）現行演奏が能の一噌流に即した形となった要因は、家元が一噌流を学んだことにあると考えられる、と述べた。鎌田氏が挙げた５世の発言「能の通り演出しては芝居と言う芸術が消えてしまいますから…能になりきらぬ様に手加減」と、６世百之助の「本物の能の手を…長唄の中にそれを活かすことができるはず」という発言が、技法の変遷の背後にある２つの意識を語る。典拠

であるが併存する異種の芸能「能」への対し方に、実演家の立脚点が見えて興味深かった。　奥山けい子

シテ方観世流能楽師・五三世梅若六郎と横浜
―素人弟子とのかかわり合いを中心に―

三浦裕子

三浦氏は、53 世梅若六郎が横浜の素人弟子を稽古する様子を通じて、彼の功績を明らかにした。稽古を始めるきっかけは1881年、梅若家が横浜の大商人と知り合ったことである。氏は稽古の回数を時系列で追いながら、初世実が梅若家の役者を同伴し、中でも六郎が頻繁に稽古に出向き、免状を発行し、稽古場を増やし、団体を作り、能舞台を建設していく過程を示した。氏は最後に、梅若家の横浜での稽古は、初世実が師匠となり 53 世六郎が代稽古を行なう立場であったことと、免状発行を重視したことを述べ、さらに横浜の団体は大商人と稽古熱心な人々に恵まれていたと述べた。

明治以後、貿易港として急速に発展した都市に梅若家が根を張っていく様子を、三浦氏は明確に示した。このような形で能楽の基盤が形成された地は、横浜以外にないのかもしれない。他家の能楽師や他分野の芸能が横浜に進出した過程にも、関心のわいてくる発表であった。　奥山けい子

◇研究発表１－C（司会：濱崎友絵）

ユダヤ人の伝統的な結婚式におけるクレズメルの音楽の社会的機能と音楽的特徴

三代真理子

クレズメルとは、17 世紀頃から中東欧ユダヤ人社会の婚礼や祝祭の場で器楽を演奏してきた楽師で、本発表は彼らの音楽の伝統的な結婚式における社会的機能と音楽構造との関係を説明するものであった。結婚式は５場面に分けられ、各々で奏される音楽に期待される機能（泣きをうながす、行進をリードするなど）が提示された後、具体的楽曲の音楽的特徴が、旋律線の形状、旋法、リズムやテンポ、和音進行、装飾の５側面から分析された。結果は５項目×５側面の 25 マスの一覧表に示され、場面の社会的機能と音楽構造の相関関係が指摘できるとした。データの提示法や発表構成、時間配分など、口頭発表としては非常に良い印象を受けたが、肝心の内容的信頼性には疑問を感じた。発表後の質問はいずれも、使用音源の収集・選択方法や分析手順の確認に向けられた。音源はフィールドワークで収集されたものではなく、すべて出版物やネット上に公開されているものとのことだが、分析結果があまりにも整然としているため、むしろ分析対象とする音源の選択段階で何らかのバイアスがかけられているのではないかという疑いは晴れなかった。　田中多佳子

旋法体系の構造―アラブ・中東の歴史・社会・文化などを加味した多元的文脈で考える―

飯野りさ

アラブ音楽の旋法（マカーム）の体系は、音楽学的に音階音と旋律様式の二要件によって説明されるのが常だが、旋法の数については三つから 100 まで専門家によって一定しないのは何故か。イスタンブール、カイロ、バグダードという音楽の中心地からほぼ等距離にあるアレッポの音楽文化の観察に基づいて、その理由を多元的に考察したものである。実践者／理論家、声楽／器楽、初心者／専門家、都市／周辺部といった違い、歴史的・地理的文脈、近代的思考の影響などさまざまな要因があげられ、レジュメ最後の手書きの概念図は非常に刺激的である。しかしながら、以上は筆者がレジュメ等から推測した部分が大きく、プレゼンテーションからは伝わって来なかった。発表終了直後にまず「内容は評価するが、口頭発表としてはきわめてひどく不愉快」との痛烈な批判があったように、聞き手が予稿を手に臨んでいるにも関わらず、発表者は読み原稿の準備もなく、レジュメにもない背景説明に半分以上の時間を費やした揚句、後半は異常な早口になり、結論の十分な説明には至らなかった。筆者は数年前の大会でも同発表者の報告を担当したことがあるが同様であった。私自身、研究内容には深い関心と期待を寄せているだけに残念である。時間芸術である音楽を扱う本学会の本質にも通じる重要な部分として、口頭発表の場の意味を是非再考いただきたい。　田中多佳子

オスマン朝末期の楽譜

松本奈穂子

トルコにおけるオスマン朝末期の楽器出版をめぐる研究で、多くの楽譜の例示と共に、演奏形態や掲載曲種などの分析と考察が述べられた。出版が開始された 1870 年代は、微分音を無視しトルコ古典音楽に和声を施したピアノ譜というヨーロッパ音楽との折衷タイプが主流だったが、20 世紀に入ると、行進曲や舞曲にその対象が変わる一方、記譜法を工夫して古典音楽の備忘録としての単旋律譜も普及し始めるという。内容的に非常に興味深く情報量も多かった分、いささか論点がぼけ、未消化に終わった感もある。発行部数や購買層などに関する質問に、不明点は多いが、ピアノ伴奏付のものはピアノを持てる富裕層、しかも西洋音楽に抵抗のないキリスト教徒と推測されるとの回答であった。出版楽譜やその分析による研究は、ヨーロッパ音楽の研究においては重要な部分を占めるが、その他の音楽文化においては多いとは言えない。他の文化圏にも応用可能な新たなテーマとして今後の展開に期待したい。　田中多佳子

◇研究発表２－A

〔セッション〕

長唄の作詞者について

発表者代表：配川美加

発表者：稀音家義丸（非会員）、星野厚子

未だ本格的な検討がおこなわれていない長唄の作詞者について、その特定の方法を探った意欲的なセッションであった。先行研究において長唄の作詞者は狂言作者としたものが多いが、長唄の演奏家（タテ三味線）とするものもあり、解説の類においても統一するに至っていない。注目すべきは、正本などの内題下の名前に付された「述」で、作詞を意味したものと思われる。ただし初版と再版とでは記述が異なることもあり、注意深く読み解く必要がある。これらのことが星野厚子氏から報告された。そして配川美加氏は、まず正本による「述」の推移を示した。それによると、タテ三味線の名前に「述」が増えるのは、19 世紀以降だという。また狂言作者の署名がある変化舞踊の歌舞伎台本には、長唄の正本においてタテ三味線に「述」が付けられている曲の歌詞が載せられない傾向があるという。狂言作者だけでなくタテ三味線も作詞をおこなった可能性をうかがわせる、興味深い事例であった。

ところで、内題下の名前に付されるのは「述」だけではない。例えば「補」は全面的な改作、「章曲」は作詞作曲などというように、長唄曲の成立事情などに鑑みると、それぞれ異なった意味をもっているのではないかということが、稀音家義丸氏から紹介された。

本セッションは江戸時代の江戸という地域を対象とした報告であったが、作詞者に関するさまざまな検討方法とその注意点を示したことは、今後の研究の大きな布石となるであろう。またこれまで積極的に肯定されてこなかった、長唄のタテ三味線も作詞をおこなったということに関して、その可能性を大いに高めたことも成果のひとつである。これからは対象とする時代を明治期まで広げたり、他種目における作詞者の状況を探ったりしながら研究をすすめていくということである。このセッションを皮切りに、長唄曲の作詞者についてより網羅的な検討がおこなわれることを望む。

大久保真利子

◇研究発表２－B（司会：丸山洋司）

ポップカルチャーとしての部族民謡の再生

―インド北東部ナガランド州チャケサン族のポリフォニー《Li》からの考察―

岡田恵美

インド北東部ナガランド州とミャンマー側に居住するナガ族下位グループ、チャケサン族はほとんどがキリスト教徒で、生業は稲作である。首狩りや若者宿モランなどの伝統文化も有した。ポリフォニー様式の民謡Liは、南アジア音楽に一般的なモノフォニック構造との違いがある。最大では混声８部合唱があるとのことだが、本発表では女声２部合唱が示された。Liは、ポップカルチャーへの脈絡変換を受けているとも報告された。民謡ユニットTetseo Sistersの活動は、Pops政策に重きをおく州政府も支援し、州も過去のテロリズムイメージからの脱却と観光産業にも利用する。Q&Aでは、用語法「～族」の可否について、アフリカ音楽研究者から指摘があった。報告者も「～人」などを心がけるが、インド憲法には「指定部族scheduled tribes」の用語法がある。発表者も、ナガ族がこれに含まれると回答した。

小日向英俊

文化の担い手の創造

―ロシア民俗バラライカの再興を事例として―

柚木かおり

コンサートバラライカと異なり伝統維持が困難となった民俗バラライカについて、2000年代中盤以降に見られる担い手(再)創出が報告された。ロシアの文化活動における公設/私設の区分に基づけば、新たな担い手たちは、私的資金による私的活動として動く私設部門の新たな潮流であるとのことである。発表者はその起因としてロシア経済の安定、SNSによる情報交換の普及を指摘した。その上で、1.「舞台化したフォークロア」としての演奏機会の創出やバラライカ博物館の創設、2.俳優が私費を投じて「消えた」伝統を調査して掘り起こしてYouTube上で発表、3.公設に分類される国立ロシアフォークロアセンターによる民俗器楽バラライカへの着目と公費投入の事例が、映像とともに報告された。だが３.の事例も、ある講師の私的興味から発展したものだ。音楽文化の公的/私的部門の役割が、情報インフラと「シェア」の概念により変化する事例としてみると興味深かった。

小日向英俊

生きられた楽器の研究に向けて―南米アンデス地域における伝統楽器の製作、流通、使用、廃棄に関する試論―

相田豊

南米アンデス地域の伝統楽器を、楽器学的な分類や分布の観点からではなく、「生きられた楽器」として生態的に捉え直そうとする試みである。先行研究によると、この地域には420種以上の楽器があるという。発表者は、伝統楽器の材料調達、製作、流通、使用に至る儀礼などの各フェーズを考察し、これを「動き」の観点から捉え直そうとした。伝統楽器にはコミュニティー内で自給されるイメージがあるが、材料入手、使用地と異なる場所での製作、販売、使用に先立つ調律儀礼を経て音楽を奏でることができる存在になるとのことである。発表内ではあまり触れられなかったが、廃棄フェーズも考えて、楽器の「一生」を動的に捉えることには意味がある。た

だ、質問者への回答でも触れられたが、その流通はかなり多様かつ広範なようである。自然資源が人間の製作技術と儀礼を経て楽器になり、再び廃棄を経て自然へと帰る。楽器を巡り、壮大なエコシステムが描けそうである。　小日向英俊

◇研究発表２－C（司会：永原恵三）

東京音楽学校で学んだ中国人留学生の帰国後の活動について

尾高暁子

東京音楽学校に学んだ中国人留学生について、従来は清末の重要人物に集中しほとんど注目されて来なかった辛亥革命以降の時期に着目し、その主要な人物の活動や人物関係について調査した意欲的な発表である。特に『東京音楽学校入学願書資料』という一次資料に見えるあまたの人名を一人一人精査して得られたデータは、非常に貴重なものだと言える。そこから判明した事実としては、本科生よりも選科生が多かったこと、他校との兼学率が高かったこと、私費生が多かったことなどが報告された。また帰国後に北京・上海などにそれぞれ設立した音楽学校・音楽結社、さらに上演活動・出版活動を巡って、彼らが本国でどのように活躍したのかも明らかにされた。近代日本音楽史のみならず、中国の近代音楽史研究にも欠くべからざる貴重なデータを提供する、重要な研究成果であると評価できよう。今後のさらなるデータの蓄積と整理・分析・公開を進めて下さるよう期待しつつ、厖大な資料に取り組まれた発表者に敬意を表したい。　明木茂夫

李叔同の歌曲創作と日本留学

彭泓

李叔同（1880～1942）は近代中国に於いて著名な音楽家・書家・美術家・演劇活動家であり、晩年は得度して僧侶として活躍した。本発表は特に李の日本留学期（1905～1911）に焦点を置き、その創作活動・交遊関係・音楽思想・出版活動について調査し、考察を行ったものである。例えば李の交遊関係について、先行研究では日本の雅楽家で書家の上真行（うえ・さねみち）に李が師事したとされているが、李の日記を精査した結果、上への言及が一箇所しかないこと、その日記の内容も師事関係を連想させるものではないことから、二人の間に交流があったのは確かであるものの、師事したとまでは言えない可能性があることを明らかにした。その他にも、留学の前と後とを比較しての音楽思想の変遷・声楽作品の作風の変化など、李自身の文章や楽曲実作に即した実直な調査結果が報告された。今後の李叔同研究の基礎となることはもちろん、資料面でさらに突き詰めつつより詳細な研究へと発展することが期待される。　明木茂夫

パカワリー舞踊音楽学校におけるタイ伝統音楽の実践

山下暁子

1950 年代にバンコクに設立され 80 年代まで運営されていた、タイのパカワリー舞踊音楽学校とその設立者のプラシッド・シラパバンレンの活動の意義を考察した発表で、インタビューや一次資料の調査に基づきその活動が具体的に分かりやすく紹介された。質疑では、プラシッドが「本物」のタイ音楽・舞踊を外国に提供しようとしたことについて、「本物」とは何かをめぐって活発に議論がなされた。一般に、ある人物の事績が正当に評価されていない場合、その要因としては、その人物の事績が何らかの理由で単純に世に知られていない場合と、通行している評価の基軸がその人物の事績の方向性に合致していない場合の二様が考えられる。前者の場合は、ひたすら事績を掘り起こして詳細に提示していくことで評価を変え得るが、後者の場合、評価の理論的な枠組み自体を見直して提示する作業が必要となろう。この例がいずれにあたるか筆者には分からないが、こうした問題を改めて考えさせる発表でもあった。　遠藤徹

◇研究発表３－A

〔パネルディスカッション〕

伝統音楽研究における定量的アプローチの可能性と課題

―インド音楽世界の動向を事例として―

パネリスト代表：田森雅一

パネリスト：寺田吉孝、田中多佳子、小日向英俊、竹村嘉晃

パネリスト代表の田森氏は、近著『近代インドにおける古典音楽の社会的世界とその変容』（2015）において、北インド古典音楽の徒弟制度ガラーナーを詳細に分析するかたわら、音楽家を支える社会の近代化に伴う変容にも注目してきた。本パネルはその変容をいかに客観的・包括的に捉えるかという問題へのアプローチとして、同著にも言及された『インド音楽家名鑑』第１版（1968）第２版（1984）を対象として、五名のパネリストが行った分析の報告であった。それはフィールド経験豊富なインド音楽研究者による『名鑑』の読解ともいえよう。

田森氏による問題提起と概要提示に続き、田中氏は南北の音楽家の居住地および師匠の情報に注目した。特に師匠の欄について、『名鑑』情報を駆使することで数世代にわたる相承系譜を確認できる可能性を示した。小日向氏は海外渡航情報を精査し、南インドの演奏家も海外活動が意外に活発であること、北インド演奏家については声楽家の海外公演も比較的多いことなどを指摘した。南インドを担当した寺田・竹村両氏は、居住地情報にみられたアンドラプレデーシュ、カルナータカといった地方の音楽文化への注目が今後必要であるこ

と、師弟関係においてブラーマンと非ブラーマンとの間に一定の交流が認められることなどを指摘した。

『名鑑』の分析は南北インドを統一的な観点で比較する契機をもたらした。また分析の所見はこれまでのインド音楽像を部分的に見直し、新たなフィールドワークの可能性をも導くものとなった。欲をいえば『名鑑』自体の成立事情、編集方針について詳しくききたかったところである。

今回は『名鑑』という、あらかじめ編集されたデータを対象にしたものであったが（それでもデータ処理には膨大な作業量を要したに違いないが）、同様の手法は、情報空間をリアルタイムに飛び交う、いわゆるビッグデータにも応用できるに違いない。それはおそらく田森氏の目指すところでもあろう。今後、情報工学など各種分野との間で方法と成果を共有することで、本研究がいっそう深まり、応用可能性を得ていくことを期待する。　植村幸生

◇研究発表３－B（司会：寺内直子）

植民地朝鮮における邦楽の公演空間
―京城府民館での公演を中心に―

金志善

本発表は植民地朝鮮における邦楽公演について、京城府民館（京城電気株式会社出資）での公演を中心に、当時朝鮮総督府の機関誌たる『京城日報』掲載の邦楽関連記事から、その実態を考察するものである。発表では、『東亞日報』、『朝鮮と建築』（朝鮮建築会機関誌）などの記述に基づき、京城府民館の建設の背景と経緯、建物、施設、音楽関連設備および用途について、次いで『京城日報』の記事から邦楽の公演およびそれに付随する状況について紹介がなされた。

フロアからは、上演された民謡をめぐって朝鮮代表民謡が日本語であることの可能性および民謡と聴き手の出身地の関係性の指摘、調査対象の期間が短く全容の把握は困難ではないかという疑問、府民館での邦楽以外の公演に関する質問などがなされた。本発表は、当時最大の上演空間であった府民館での公演あるいは新聞記事になりうる内容、といった制限下での実態把握となったが、この方面の研究も進展し始めており、植民地朝鮮における邦楽の全容の解明が大いに待ち望まれる。　澤田篤子

韓国地方国楽院における国楽振興の役割と実状について―
国立民俗国楽院、国立南道国楽院、国立釜山国楽院を例に―

山本華子、金奎道

発表者は昨年度大会にてソウルの国立国楽院の国楽普及と教育に関する考察を発表されたが、これに引き続き、本発表は地方の三国楽院の館長と館員、および各国楽院を傘下に置く文化体育観光部の国楽院担当者への聞き取り調査を含む現地調査の結果から、各国楽院の特徴、活動内容（公演、教育・体験、研究）、運営方針を整理し、国楽振興を「芸術文化の振興→頂点の伸長」と「文化の普及→裾野の拡大」という２視点から検証したものである。

フロアからの質問や意見より、国楽院にかかる国家予算が非常に潤沢であること、また日韓の文化交流における韓国側の個人と国家の対応の仕方が微妙に異なることが浮き彫りにされ、日韓国交正常化 50 周年の本年、日本の伝統文化振興についても示唆深いものがあった。今後、中央と地方に存在する国楽院と上位機関たる文化体育観光部との関係性とその効果をより一層明確にされ、さらには国楽教育を司る教育部との関係性も含めて、韓国の国楽振興の全容が明らかにされることに期待したい。　澤田篤子

田辺尚雄の沖縄・八重山諸島音楽現地調査（1922 年）
―「田辺文庫」を基礎資料として―

高橋美樹

田辺尚雄は 1920～30 年代にかけて朝鮮、台湾、沖縄、中国、樺太、南洋、満州の音楽調査を行ったが、本発表はそのうち沖縄・八重山諸島の音楽現地調査の記録を分析することにより、「音楽のエスノグラフィー」として再構築することを目的とする。発表では調査に対する沖縄側の準備過程、田辺の沖縄調査の目的、調査の行程、「田辺文庫」資料との照合、山内盛彬の提案について詳細なデータのもとに報告がなされ、この調査が、沖縄にとって「外向き」に沖縄音楽を発信する最大の契機となったとする。

質疑応答では、田辺の調査における沖縄音楽保存については、調査の公表、人脈の活用、社会的還元という形で具体化され、また調査の経費については沖縄以外に対しても財団法人啓明会の支援があり、都度調査報告がなされていたと説明された。研究者の活動への国家政策の介入の問題に対して、沖縄調査に関しては現地の人の強い要望によるものとの見解であったが、今後、田辺の音楽調査全般を通した振り返りが望まれる。　澤田篤子

◇研究発表３－C（司会：横井雅子）

明治期の手風琴の曲集の関係性―その記譜法の分類から―

渡邊佐恵子

明治期の音楽受容に関する興味深い資料研究がまたひとつ登場した。明治 20 年代から 30 年代に民間で流行した「手風琴」（現在のアコーディオンの原型）の研究である。手風琴は比較的安価で、持ち運び易く、馴染みの俗曲を独習できることから、当時の人々の間で盛んに演奏されたという。渡邊氏

の発表は、明治 23 年から 44 年までに手風琴曲集として出版された楽譜 46 冊を調査するなかで、「手風琴譜」という記譜法に着目し、曲集間の相互関係性を考察するものであった。発表では、記譜法は一律でなく、五線譜、数字譜、手風琴譜（手風琴の押引きと、十の鍵を示す奏法譜）、これらを併記した譜など多様であったことや、箸尾竹軒著『手風琴独案内』の重版や他曲集によるその模倣など、「手風琴譜」の波及の様子が報告された。フロアから質問があった曲集の著者の経歴、曲集に掲載されたレパートリー等についても気になるところだ。今後の研究成果に期待したい。　井上登喜子

住吉村におけるピアノの普及
―三木楽器の帳簿（1902-1940）をもとに―

齊藤紀子

大阪の楽器商・三木楽器の保存史料『ピアノ納入簿』に基づき、日本のピアノ普及に関する研究に取り組んでいる齊藤氏による今回の発表は、住吉村（現在の兵庫県神戸市東灘区と灘区の一部）を事例に取り上げ、当該地域の住宅地開発を切り口に、ピアノの普及を考察するものであった。住吉村は、1900〔明治 33〕年の村山龍平（朝日新聞創業者）の移住を機に、多くの実業家が移住し、鉄道や道路の整備、社交場や私立の教育機関の創立など、郊外住宅地開発や実業家の地域貢献の先駆的事例としても重要な場所だ。実業家宅、教育機関、社交場など地域コミュニティの拠点へのピアノ納入事例をデータに基づいて検証する手法には説得力がある。フロアから指摘があったように、ピアノの納入が地域コミュニティ形成にどのように寄与したかという点を深掘りするためには、地域の諸活動（音楽活動・教育活動・社交等）へ視野を拡げて資料にあたるのもよいだろう。研究の更なる進展に期待したい。　井上登喜子

三線の仲買人「三線バクヨー」の商世界

栗山新也

栗山氏の研究は、文献資料と聞き取り調査を通して、現在は職業にする者はいない三線の仲買人「三線バクヨー」の商いの具体的な姿に迫ろうとするものだ。三線の流通には、職人が制作した楽器の店舗を通じた販売と、個人間での譲渡・売買・交換というやりとりがあるが、「三線バクヨー」が受け持つのは後者だ。まず、文献資料から、三線の継承の特徴（売買、物々交換、無償での継承等）と戦前のバクヨーの記録（昭和期のハワイ移民への三線の斡旋など）が紹介された。次に、戦後のバクヨーに関する聞き取り調査（三線職人と演奏家から成る 11 人の証言者）から、バクヨーの商いが、①古い三線の修理、販売、②三線店からの仕入れ、③職人に制作させた楽器の販売など多様だったこと、「三線の目利き」たちとの交渉自体が楽しまれていた実態が明らかにされた。「三線バクヨー」の商世界が詳らかになるにつれ、三線という楽器に対する人びとの多様な価値観の存在に気づかされた発表であった。　井上登喜子

◇研究発表４ - A
〔パネルディスカッション〕
東南アジア諸地域のゴング文化の相互関連

企画・司会：福岡正太
パネリスト：柳沢英輔、福岡まどか、
梅田英春、藤田幹嗣（非会員）

このパネルディスカッションでは、東南アジアの諸地域にみられるゴングの製作や調律、ゴングにまつわる儀礼や芸能、信仰などを「ゴング文化」として捉え、ベトナム中部高原北部とインドネシア各地の事例から、東南アジアのゴング文化について報告がなされた。はじめに福岡正太氏が研究主旨を説明し、藤岡氏がベトナムの平ゴングの映像について紹介した後、それぞれの地域のゴング文化について述べられた。

柳沢氏はベトナム中部高原北部コントゥム省、ジャライ省のゴング文化について報告した。柳沢氏は農耕・葬送儀礼で行われていたゴング演奏が、1970 年代になると新たなゴング・アンサンブルが製作され、舞台で演奏されるようになったことを述べた。また伝統的なゴングの調律は耳と感覚によって行われていたが、近年、コンピューターのアプリを使用して調律する者が出現したことを述べた。

次に福岡まどか氏は、インドネシア・ジャワ島中部ジョクジャカルタの事例について報告した。この地域は青銅のガムラン演奏が盛んで、青銅楽器の需要があるにもかかわらず、歴史的に青銅のゴングを鍛造する工房がほとんど存在していないことが指摘された。その一方で、鉄や真鍮の楽器製作を行う工房が多数存在し、鉄や真鍮で作られた楽器が青銅のものよりも安価であることから、現在、鉄製の楽器の需要が高まっていることが報告された。

最後に梅田氏はバリ島とロンボック島における鉄製のゴングの普及とその背景について述べた。梅田氏は鉄製のゴングが普及した理由について、青銅の材料となる銅と錫の値段が高騰したことにより、安価な鉄製のゴングの需要が増加したこと、移動しながら演奏するバリ島とロンボックのアンサンブルにとって、重量の軽い鉄製のゴングは実用的であったことをあげた。またバリ島では、鉄製のゴングが普及することによって、青銅製のゴングが持つ神聖性、信仰との結びつきが希薄になりつつある現状を指摘した。　鈴木良枝

◇研究発表４－B（司会：尾高暁子）

乗杉嘉壽編『音楽』の特性と意義―1930～40 年代の東京音楽学校をとりまく状況とともに―

仲辻真帆

研究発表４　B の仲辻氏と橋本氏の発表は、戦前期に東京音楽学校校長を務めた乗杉嘉壽に焦点を当て、乗杉が主導した教育事業とそれを取り巻く周囲の言説を考察するものだった。

仲辻氏は、乗杉が編纂した教科書『音楽』を対象に、その成立の背景や周囲の反応を考証し、掲載曲を分析することで、乗杉の目指した音楽教育を浮き彫りにした。『音楽』は、昭和 12 年（1937）に帝国書院より発行された中等教育用の教科書で、全５巻から成る。作曲は、下総皖一、橋本國彦、信時潔、片山頴太郎らによるものだった。掲載曲は、巻を追うごとに難易度が高くなるよう配置され、独唱・斉唱曲のほか輪唱・合唱曲も収載され、調号、転調、借用和音、可変拍子を多用した曲もあるという。乗杉の意図のひとつには、「外国の借り物ではなく日本人の手による日本の歌曲を創作する」ことにもあった。「日本的なもの」の具現化や、当時の作曲界における捉えられ方についても興味を引かれる発表だった。

黒川真理恵

乗杉嘉壽東京音楽学校長時代への敗戦後の視座の転換―『聯合軍總司令部ヨリノ指令』と小宮豐隆資料を手掛かりに―

橋本久美子

橋本氏の発表は、乗杉嘉壽をめぐる評価が、敗戦後どのように形成されていったのかを、GHQ 文書や、敗戦後に校長に就任した小宮豐隆の資料をもとに、検証したものだった。乗杉は、官僚的で戦意高揚に協力した人物であるという画一的な評価が定着する一方で、邦楽科の設置や先進的な教育事業を主導し、実際に面識のあった生徒からは親しみを持って接せられていた。橋本氏は、後世の人々による言説を、敗戦直後の膨大な資料を読み解くことで検証していった。邦楽科の廃止案をめぐっては、昭和 20 年 10 月に乗杉が校長職を辞し、昭和 21 年１月に小宮が引き継ぐまでの数ヶ月間の資料を丹念に読み解くことで、敗戦直後の東京音楽学校でなされた意思決定のプロセスに迫ることができた。

発表は、橋本氏の長年に渡る研究に基づき、豊富な写真スライドとともに進められた。資料研究における冷静な分析作業とそれを積み重ねることの意義を、改めて考えさせられた発表だった。

黒川真理恵

大阪北新地浪花踊の新史料をめぐる一考察

笠井津加佐、笠井純一

大阪北新地で演じられた浪花踊に関する新史料の紹介と、そこから浮かび上がる人的交流ネットワークを明らかにしたものだった。史料は、戦前期に北新地で芸妓取扱店「永楽席」を営んでいた佐藤駒次郎家に伝わるもので、舞台映像、舞台写真、舞台美術史料、番付、劇場（北陽演舞場）の写真・設計図、関係者の書簡など数百点にのぼる。いずれも大正期から昭和期に至るまでの、大阪の花街および浪花踊を知ることのできる貴重な史料である。なかでも、北陽演舞場に関しては、施工を担当した大林組による設計図や写真も残されており、近代劇場建築の観点からも興味深く感じられた。

質疑応答では、地方（じかた）を担当した演奏者についての質問があり、関西の演奏者とも関係を保ちながら、長唄や常磐津の関東の演奏者とも交流があったとの回答があった。当時を知る人々への聞き取り調査も始められたとのことで、上方文化の研究と継承に大変期待される発表だった。

黒川真理恵

◇研究発表４－C（司会：配川美加）

現代合奏作品における「三味線らしさ」―中島勝祐作品《西鶴一代女》の分析を中心に―

コリーン・クリスティナ・シュムコー

シュムコー氏の発表は、現代邦楽の１曲を選び、「三味線らしさ」を分析したものであった。この曲では、４種の三味線を一緒に演奏するのではなく、場面ごとに使い分けており、長唄を使う場面では囃子、地歌を使う場面では尺八と箏も一緒に奏される。三味線は種目による表現の違いが大きいが、この曲では、音色や特徴的な旋律、リズム感等も含め、三味線音楽の各様式が尊重されている。シュムコー氏は、それぞれの三味線音楽の様式の特徴をとらえ、曲の構成における用いられ方を丁寧に分析し、曲の本質的な特徴をとらえることに成功していた。ただ、「三味線らしさ」「情感」「音の変化」など、用語の用い方に分かりにくい点があったのが残念であった。先行研究を参考に用語を精査すると、分析の精度も上がると思う。フロアからの質疑は活発であったが、その中で、不協和の音程のとらえ方に伝承者との意識の違いがみられた。今後は、伝承者の意識も考慮し、いっそう研究が深まることを期待したい。

福田千絵

松阪春栄の二面の箏による合奏のテクスチュアへの一考察―近世邦楽の音楽言語と作曲技法の創造的継承を探って―

佐藤岳晶

佐藤氏の発表は、西洋音楽の対位法のような理論を近世邦楽でも構築したいという大胆な試みで、明治新曲の時代に松坂春栄によって補作された４曲の箏曲を取り上げ、詳細に分析を行ったものであった。西洋的な発想で分析を行っている

ように見えたが、質疑を重ねるうち、箏曲の伝承者の意識を汲みとりながら行われたことが分かった。手事の中心部分は分析結果が明瞭であったが、先行研究も多い部分である。今後は、より複雑な歌やチラシの部分について、分析が深められることを期待したい。また、理論の構築のためには、複数の曲の共通性、年代に寄る変化や曲の個性も考慮する必要があり、理論の構築には長い時間が必要と思われるが、伝承者の意識を手掛かりにすることが近道ではないかと思う。質疑の際には、伝承者と分析者の意識の違い、箏曲の歴史的な様式変化についても問題意識を持たれていた。伝承から引き出された理論は、学習にも作曲にも役に立つはずである。今後の進展が楽しみである。　福田千絵

小泉文夫の理論に対する諸批判の考察

宮内基弥

宮内氏の発表においては、小泉文夫の音階理論を総括し、その後の各研究者による批判を考察し、小泉理論を発展的に解釈する新たな主張が述べられた。日本音楽の分析において小泉理論は幅広く活用されてきているが、批判もあり、音楽種目ごとの特性に合わせて新たな理論を展開する動きもある。私自身、小泉理論には限界があるのではないかと思っていた。しかしながら、宮内氏の姿勢は、小泉理論の問題点を把握しながら、発展的に継承していこうとするものであり、今後の音階論に一石を投じる姿勢と思われた。新たな、そして宮内氏の言う「精緻な場合分け」等による解釈を通して、現在の日本の音階論の突破口が開けることを期待したい。ただ、小泉理論の紹介部分が長くなり、肝心の諸批判についての考察に時間を割けなかったのが残念であった。フロアとは、伝承と理論との間に起こるジレンマについて議論があった。今後のより丁寧な論理展開を期待し、新たな成果発表を楽しみにしたい。　福田千絵

◇研究発表５－A

〔パネルディスカッション〕

アジア・太平洋戦争期の南方向け音楽工作

パネリスト代表：丸山彩

パネリスト：酒井健太郎、織田康孝（非会員）、松岡昌和（非会員）

若いメンバーの揃ったパネルで、新しい知見と研究の楽しさに満ちていた。刺激を受けた参加者諸氏も多かったことだろう。

アジア・太平洋戦争期の日本が、「大東亜共栄圏」なる新秩序実現のために打ち出した政策のうち、音楽に関わる部分がテーマである。はじめに南方軍政の概要が提示された後、日本で編纂された『ウタノエホン　大東亜共栄唱歌集』の内容、シンガポールにおけるラジオ放送を通じたプロパガンダの事例、ジャワにおける新聞を介した歌の普及策の事例が報告された。織田氏によると、大東亜共栄圏の主目的は南方からの資源獲得だったとのこと。ここで扱うシンガポール、ジャワともに陸軍の管轄で、文化人を徴用した宣伝班が編制され、新聞社も進出した。なるほど、酒井氏が紹介した『ウタノエホン』は、朝日新聞社の刊行である。スライドショーで全ページが提示されたが、カラー刷りでかなり豪華な印象を受けた。歌詞は懸賞付きで公募され、歌唱指導や発表会、音盤制作など、さまざまなメディアが参画したこれらの唱歌は、南方でどのように用いられたのか。松岡氏によると、シンガポールにおいて『ウタノエホン』から紹介されたのは２曲だけ。日本語新聞「サクラ」や学校向けのラジオ放送を通じて相当数の日本語の歌が紹介されたが、それらは皇民教育に資するというよりも心象風景の提示、あるいは日本語普及の手だてに過ぎなかっただろう、という。丸山氏が報告したジャワの事例は、朝日新聞社によるグラフ雑誌と現地語新聞から、日本の歌の移入と翻訳の実際を調査したもの。『ウタノエホン』唱歌のほか、啓民文化指導所によって制作された歌もプロパガンダ付きで伝えられた。

フロアからは、海軍の方法も調査すべきという助言、宣伝員は民間の社員として派遣された例もあったという情報、現地の受け止め方についても知りたい、という期待を込めたコメントが出され、今後の進展が楽しみな幕切れとなった。

髙松晃子

◇研究発表５－B（司会：小柴はるみ）

ゴング合奏と気分の問題

―カンボジア北東部クルンの水牛／牛供犠から―

井上航

本発表は、カンボジア北東部のクルン人のコミュニティの儀礼（水牛／牛供犠）の中で慣習的行為に基づいて演奏されるゴング合奏が、クルンの人々の「気分」とどのように関わっているかを明らかにしたものである。この発表では、ゴングの音響と儀礼行為者（参加者）の「気分」を研究対象とし、綿密な現地調査と現地でのインタヴューを通して、たとえゴングの音響的な打奏が同じであっても、儀礼参加者の気分の様相には大きな差異があることを指摘した。また発表では一連の儀礼の過程が編集され、映像資料として用いられたが、この資料は、儀礼における楽器にだけ焦点を当てるだけでなく、儀礼の過程や、それと関わる人々の情動に焦点を当てた映像として興味深く、発表の理解に大いに役立った。民族音楽学における新しい研究視点と方法論を提示は、聴衆に大きな刺激を与えたものと思われる。　梅田英春

リンベによるオルティン・ドーの演奏法 - 循環呼吸法―オルティン・ドー「四季」の分析、実演を通して―

マハバル・サウガレゲル

本発表は、モンゴルの横笛であるリンベの演奏者でもある発表者が、その実践を通さなければわからない呼吸法、演奏法について詳細に言及したものである。リンベは一般には循環呼吸法によって音を途切れなく演奏する楽器であり、この奏法は 2011 年にユネスコにより世界文化遺産に登録されている。発表者はオルティン・ドー「四季」の楽曲分析を通して、歌唱とともに演奏されるリンベが、循環呼吸法で演奏されることにより、オルティン・ドーの繊細な装飾音を表現できることを指摘した。さらに実際には、循環呼吸法で演奏しているとはいえ、オルティン・ドーの演奏の際には、フレージングやフレーズの間で隠れた息継ぎが行われており、それが演奏にとって重要な役割を果たしていることに言及した。また発表の最後には、分析対象になった作品を本人が演奏したことで、発表の内容を具体的に理解することができた。

梅田英春

日本におけるモリンホール（馬頭琴）の受容に関する一考察

ツェルゲル

本発表ではモリンホールの 1980 年代以降の日本における受容の過程と、それによって生じたその現象について明らかにした。日本に受容されたモリンホールは、モンゴル国のものと内モンゴルの二種類があり、それぞれの楽器はその形態から調弦、指使いに至るまで異なっている。1980 年代以降にほぼ同時期に受容され、現在ではそれぞれの楽器の愛好者が日本にいるが、その違いを知らずに楽器を始めた日本人も多いという。楽器の選択は後の学習プロセスに大きく影響するからである。またモンゴル語が理解できないために、楽器が奏でる民謡の「モンゴルらしさ」が表現できないなどの問題が起きている。今では日本の歌、日本語訳のモンゴル民謡をモリンホールで演奏するなどの教本も誕生した。発表者はこうした現象をネガティブにとらえず、発表者の言葉を借りれば「両文化の馴染み合い、合成」が生じたと結論づけた。

梅田英春

◇研究発表５ - C（司会：樋口昭）

※「越後瞽女の祭文松坂における固定性と可変性―小林ハルの《葛の葉子別れ》を出発点として―（発表者：堀江将之）」は、発表者の体調不良により中止となりました。

埼玉県秩父市旧荒川村の天狗信仰と音楽―徳丸流神楽と天狗祭りを事例として―

川崎瑞穂

埼玉県旧荒川村に江戸期から伝承されている徳丸流神楽の音楽、歴史、信仰に関する詳しい発表で、その演目の一つである「三神和合」のルーツを探り、「テケテットン」という太鼓のリズム型と天狗信仰の関係の変遷を辿った。テケテットンと天狗信仰の密接な関係は知られているが、神明社神楽の「三神和合」では他の神格にも用いられている。その理由も検証した。神明社神楽は、浅間（せんげん）神社神楽および隣の旧荒川日野地域で伝承されている三峯（みつみね）神社神楽と同じ徳丸流である。神明社神楽に関しては口頭伝承があるが、資料がほとんど残っていないのに対して、浅間神社神楽には 1857 年まで遡る重要な資料が存在し、口頭伝承を併せて、徳丸流神楽の形成プロセスの一端を解明することができる。神明社神楽の伝承者の聞き取り調査によると、以前はテケテットンが娯楽でもあり宴会などでも演奏されたことから、天狗信仰から離れて他の神格にも使われるようになったと推測される。「三神和合」という演目は浅間神社神楽には存在しないが、浅間神社神楽の資料が書かれた年（1857）と三峯神社神楽が成立した年 1889 年の間のどこかの段階で、神明社神楽の伝承者によって付加された演目であることが分かった。浅間神社神楽の資料などを見ると、この３つの神楽の間にみられる大きな差異がどの段階で発生したのかを、ある程度測定することが可能であるとする。　　時田アリソン

「文化資源」としての楽曲にかんする一考察
―近現代の南インド、タミル地方の宗教芸能の事例から―

小尾淳

19 世紀から 20 世紀後半までの南インド、タミル地方の社会・音楽的状況を背景に、宗教的音楽実践「讃歌の伝統」の変容を「文化資源」の観点からとらえ直す。特にブラーミンカーストの音楽家／「楽聖」の役割の変化。10 世紀まで遡る讃歌は 19 世紀には体系化し、芸能化する。近代化とともに、音楽機関の成立もあり、作曲家への関心が高まった。「三大楽聖」言説が起こり、奇跡的なエピソードに満ちた伝記が書かれ、神聖性が付加される。かつては各地を巡礼していた楽聖は、コンサート会場で演奏するようになり、鑑賞する聴衆が生まれた。ラジオ放送も始まり、新しい音源メディアで楽曲が流通し始める。印刷技術の普及で、歌集や音楽教本が出版されたことにより、公共の領域に入った。20 世紀半ばから「埋もれていた作曲家」が発見され、再評価される。古いテクストが印刷され、レパートリーが急増した。この音楽界を支配しているブラーミンは、サンスクリットをはじめ、言語も支配してきたが、讃歌の言語の多様化が見られる。讃歌は祭礼

から伝統音楽へと移り、高度な楽曲を目指し、即興を取り入れた。音楽の近代化における伝統音楽の誕生の事例として、日本の声明の演奏会化ともあわせて、とても興味深かった。

時田アリソン

通常理事会・総会議決事項のお知らせ

2015 年 10 月４日（日）に東京藝術大学において一般社団法人東洋音楽学会の第７回通常理事会が、2015 年 10 月 31 日（土）に東京藝術大学において第４回定時社員総会が開催されました。以下にこれらの会議における議決事項のうち、特記すべきものをお知らせします。なお、定時社員総会の議決の詳細については、後掲の第４回定時社員総会議事録（抄）ならびに添付書類をご参照下さい。

１）新入会員について

理事会において、2015 年４月以降に仮承認された正会員 15 名、学生会員２名が会員として正式に承認されました。

２）80 周年記念資料集について

理事会において、学会創立 80 周年を記念して、過去の例会・大会の内容や機関誌掲載論文の目録等を収めた小冊子を機関誌の付録として編集することが承認されました。

３）定款施行細則の変更について

定款施行細則第３章第４条３の賛助会員の会費年額を「100,000 円以上」から「一口 50,000 円以上」に変更することが承認されました。

４）平成 26 年度公益目的支出計画実施報告書について

社団法人から一般社団法人への移行が完了するまで提出が義務づけられている公益目的支出計画実施報告書について、平成 26 年度の報告書の内容が承認されました。

学会 80 周年に向けた資料収集についてのお願い

学会創立 80 周年を迎えるにあたって、記念資料集の編纂に向けて各種の資料の収集を開始します。過去の大会、例会の写真等の一次資料や残しておきたいエピソードなど、皆様のお手元に学会の 80 年の軌跡を回顧する資料類がございましたら、学会事務所（LEN03210@nifty.com）または田中多佳子理事、遠藤徹理事まで情報をお寄せ下さい。会員の皆様のご協力を、よろしくお願いいたします。

ICTM（国際伝統音楽学会）に関するお知らせ

１．ICTM 東アジア音楽研究会シンポジウム開催のお知らせ

ICTM 東アジア音楽研究会（ICTM Study Group on Musics of East Asia 通称 MEA）の第五回シンポジウムがこの夏、台湾で開催されます。

日時　　2016 年８月 25 日～27 日
場所　　中央研究院（Academia Sinica）、及び国立台北芸術大学（Taipei National University of the Arts）、台湾

当研究会発足十周年を記念するシンポジウムとなります。発表申込みはすでに締め切られていますが、オーディエンスとして参加ご希望の方は、ICTM ホームページにて詳細をご確認ください。
（http://www.ictmusic.org/group/musics-east-asia）

今回は「東アジア民族音楽学？」（East Asian Ethnomusicologies?）という大テーマのもと、以下の五つのテーマが掲げられています。

1. Music and embodiment
2. Cosmopolitanism, transnational flows, creative labour markets
3. Eco-criticism and music
4. Music history, historical musics, historical reconstructions
5. New research

２．　ICTM 理事の選挙結果

2015 年夏に行われた選挙により、２名の理事と副理事長が改選されました。このたび当選したのは、理事として、Tan Sooi Beng（マレーシア）と J. Lawrence Witzleben（アメリカ合衆国）、副理事長として Razia Sultanova（イギリス）です（敬称略）。現理事会メンバーについては会報（Bulletin of the ICTM）129 号 60 頁をご覧ください。会報は以下よりダウンロードできます。
http://www.ictmusic.org/publications/bulletin-ictm

３．新しい ICTM 研究会の発足

2015 年夏に、新たに二つの研究会（ICTM Study Groups）が発足しました。Audiovisual Ethnomusicology および、Musics of the Slavic World の研究会です。それぞれの設立意図、第一回シンポジウムについては、ICTM ホームページの Study Groups の項目をご覧ください。ICTM 内にはその他にもたくさんの研究会があり、活発に活動を行っています。

ICTM 会員であれば、どなたでも興味のある研究会に参加できます。　（ホームページ　http://www.ictmusic.org/）

４．第 44 回 ICTM 世界大会（於：アイルランド）のお知らせ

日時：2017 年７月 13 日～19 日

場所：Irish World Academy of Music and Dance, Limerick（アイルランド、リムリック）

タイムライン：

発表募集要項の開示　2016 年１月

発表応募締切　2016 年９月

発表の可否の通知　2016 年 12 月

第 33 回田邉尚雄賞アンケートのお願い

第 33 回田邉尚雄賞選考委員会では、同賞の選考にあたり、推薦情報を募集しています。アンケート締切まで、あと僅かとなりました。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、皆さまからの積極的なアンケート送付を切望いたします。自薦他薦は問いません。

選考対象：2015（平成 27）年１月１日～12 月 31 日の発行物

アンケート締切：2016（平成 28）年２月４日（木）正午

記入事項：著者名、発行年月日、発行所名。
なお、論文の場合は、掲載誌名、巻次、編集者名、論文頁数も記してください。推薦理由を簡潔にお書き添えいただいても構いません。

送り先：東洋音楽学会 第 33 回田邉尚雄賞選考委員会
（郵送）〒110-0005 東京都台東区上野３・６・３ 三春ビル 307 号
（FAX）03-3832-5152
（電子メール）LEN03210@nifty.com

選考委員：井上貴子、加納マリ（委員長）、吉川周平、中原ゆかり、三浦裕子

会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ

１．会費納入のお願い

2015 年９月から新しい年度が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払込くださいますよう、お願い申し上げます。振り込み用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振込ください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員：8000 円

学生会員（大学院生を除く）、および割引申請者：6000 円

〇郵便局からの払込

ゆうちょ銀行［口座番号］00160 6-55723

［加入者名］一般社団法人東洋音楽学会

〇他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行［支店名］〇一九（ゼロイチキュウ）店（019）

［当座］0055723

２．会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会のホームページ（http://tog.a.la9.jp/about.html#7）でご確認の上、お申し込みください。

３．会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利（研究会・大会での発表、学会の発行物の受取）が行使できないことがありますのでご注意ください。

４．卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

東日本支部からのお知らせ

◇定例研究会発表募集について

昨年度より、会員の皆様から積極的に研究発表のご応募をいただき、当支部では、2016 年７月例会まで発表者が確定しています。今後、研究発表を応募予定の皆様には、2016 年秋以降の例会でご発表いただきますが、９月特別例会の開催可否は目下検討中です。検討結果は、３月発行予定の『東日本支部だより』第 40 号でお知らせする予定ですので、あらかじめご了承ください。

なお、発表をご希望の方は、発表種別（研究発表・報告等）、発表題目、要旨（800 字以内）、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先（住所、電話、Fax、E-mail）を明記の上、下記の東日本支部事務局あてにメールか郵送でお申し込み下さい。メールご利用の方で、発表希望の提出後１週間を経ても東日

本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

◇「会員の声」投稿募集

東日本支部発行『東日本支部だより』には、会員の皆様からの情報を掲載する「会員の声」欄を設けています。研究会、講演会、展示会など、会員の活動に関連する情報がありましたら、東日本支部事務局あて、お知らせください。投稿方法などの詳細は、『東日本支部だより』の最終ページをご覧ください。

〔東日本支部事務局〕
〒110-0005　東京都台東区上野３　６　３　三春ビル 307 号
東洋音楽学会東日本支部事務局
E-mail：tog.higashi@gmail.com

会員異動

会員異動は個人情報保護のため削除しました。

◆住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail等でも結構です)
◆改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)
◆事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨ご明記ください。

図書・資料等の受贈

(2015 年８月～11 月、到着順)

『イスラムと音楽　イスラムは音楽を忌避しているのか』
新井裕子　スタイルノート
『楽道』8,9,10,11 月号　(公財)正派邦楽会
『東方學會報』No.108　(一財)東方学会
『三味線音楽の旋律型研究　町田佳聲をめぐって　』
(資料 DVD 付)(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告９)山田智恵子・大久保真利子編
『雅楽　時空をこえた出会い　遠州の小京都森町の舞楽×古代中世雅楽譜の解読』(DVD)(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター第 38 回公開講座)
田鍬智志企画・構成・監修
『日本伝統音楽研究』第 12 号
京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
『雅楽だより』第 43 号　雅楽協議会
『阪大音楽学報』第 13 号　大阪大学音楽学研究室
『日本音楽学会会報』第 95 号
『音楽学』第 61 巻 1 号　日本音楽学会
『童謡の近代　メディアの変容と子ども文化』
周東美材　岩波書店
『民俗芸能研究』第 59 号　民俗芸能学会

新刊書籍

(ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物)

『NAGAUTA　The Lyrics of Kabuki』
奥村有敬他、三好企画、2,160 円
『イスラムと音楽　イスラムは音楽を忌避しているのか』
新井裕子、スタイルノート、2,700 円
『「歌」の精神史』(中公新書)
山折哲雄、中央公論新社、886 円
『ウィントン・マルサリスは
本当にジャズを殺したのか？』中山康樹、
シンコーミュージック・エンタテイメント、1,944 円
『ヴァイオリンに生きる』
石井髙、冨山房インターナショナル、1,944 円
『永遠のザ・フォーク・クルセダーズ
若い加藤和彦のように』田家秀樹他、
ヤマハミュージックメディア、2,500 円
『英国フォーク・ロックの興亡
MERURIDO MAGAZINE PRESENTS　ポップとトラッドの接点から生まれた音楽を巡る旅 』小西勝、
シンコーミュージック・エンタテイメント、2,160 円
『描かれた行列　武士・異国・祭礼』
久留島浩編、東京大学出版会、7,344 円
『沖縄ジャズロード』　田代俊一郎、書肆侃侃房、1,620 円
『オペラの 20 世紀　夢のまた夢へ』
長木誠司、平凡社、9,936 円
『音楽祭の戦後史　結社とサロンをめぐる物語』
山本美紀、白水社、2,592 円
『音楽の未来を作曲する』　野村誠、晶文社、1,944 円
『音楽は何語？　日本人はクラシック音楽をどう把握するか』　傳田文夫、メトロポリタンプレス、2,592 円
『「艦砲ぬ喰ぇー残さー」物語』
仲松昌次、ボーダーインク、1,728 円
『歌舞伎に親しむ　私の見かた・読みかた』
上田由香利、和泉書院、1,296 円
『楽器学入門　写真でわかる！楽器の歴史』
守重信郎、時事通信社、2,808 円
『合唱っていいな！　作曲・演奏・指揮をめぐって』
(燈台ライブラリ２)　新実徳英、洪水企画、1,404 円
『「聴くこと」の革命　ベートーヴェン時代の耳は「交響曲」をどう聴いたか』(叢書ビブリオムジカ)
マーク・エヴァン・ボンズ、近藤譲、井上登喜子訳、
アルテスパブリッシング、3,024 円
『義太夫を聴こう』　橋本治、河出書房新社、1,944 円
『儀礼と芸能の民俗誌』　橋本裕之、岩田書店、9,072 円

『吟遊詩人マルティン・コダックス
７つのカンティーガス』 浅香武和、論創社、2,160 円
『現代語訳　申楽談義　世阿弥からのメッセージ』
水野聡訳、檜書店、1,728 円
『古楽再入門　思想と実践を知る徹底ガイド』
寺西肇、春秋社、3,024 円
『これで OK！打楽器メンテナンス――コンサートパーカッションのチューニングと調整』
田中覚他、音楽之友社、1,512 円
『ザ・ローリング・ストーンズ楽器大名鑑』
アンディ・バビアック他、川村まゆみ訳、DU BOOKS、8,100 円
『色彩楽譜　「音のコード化」による音楽の数値解析』
小谷秀行、パレード、1,620 円
『証言で綴る日本のジャズ』 小川隆夫、駒草出版、5,616 円
『新作能マクベス』 泉紀子編、和泉書店、5,400 円
『新　イタリア・オペラ史』
水谷彰良、音楽之友社、2,970 円
『ステージ・ショウの時代』（近代日本演劇の記憶と文化３）
中野正昭他、森話社、5,184 円
『戦火のマエストロ近衛秀麿』
菅野冬樹、NHK 出版、2,700 円
『世界演劇辞典』 石澤秀二、東京堂出版、7,344 円
『成人精神疾患の治療における音楽療法
理論的な基礎と臨床実践』
ロバート・F.アンケファー他、廣川恵理訳、一麦出版社、4,320 円
『箏を友として　評伝宮城道雄〈人・音楽・時代〉』
千葉優子、アルテスパブリッシング、2,376 円
『高野辰之と唱歌の時代　日本の音楽文化と教育の接点をもとめて』 権藤敦子、東京堂出版、8,100 円
『太陽がくれた歌声　ひばり児童合唱団物語・皆川和子の生涯』 皆川おさむ、主婦と生活社、1,500 円
『宝塚歌劇は「愛」をどう描いてきたか』
中本千晶、東京堂出版、1,728 円
『伝説のイエロー・ブルース』
大木トオル、トゥーヴァージンズ、1,080 円
『童謡の近代　メディアの変容と子ども文化』
（岩波現代全書）周東美材、岩波書店、2,700 円
『70 年代シティ・ポップ・クロニクル』（ele-king books）
萩原健太、P ヴァイン、1,836 円
『七世竹本住大夫　私が歩んだ 90 年』
竹本住大夫他、講談社、2,376 円
『日本歌謡ポップス史最後の証言』
中山久民、白夜書房、3,000 円
『日本鉄道歌謡史１　鉄道開業～第二次世界大戦』
松村洋、みすず書房、4,104 円
『日本鉄道歌謡史２　戦後復興～東日本大震災』
松村洋、みすず書房、4,536 円
『昇と美智子　音楽への情熱。長野少年少女合唱団の発展』
鈴木央、ほおずき書籍、2,160 円
『ハーバード大学は「音楽」で人を育てる　21 世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』
菅野恵理子、アルテスパブリッシング、2,160 円
『はじめまして！アフリカ音楽』ムクナ・チャカトゥンバ、ヤマハミュージックメディア、2,160 円
『「ヒロシマ」が鳴り響くとき』
能登原由美、春秋社、2,376 円
『ヒット曲でわかる！ROCK&POP の音楽理論コンパクト・ガイド』ジュリア・ウィンターソン他、
大橋悦子訳、音楽之友社、1,998 円
『評伝古賀政男　日本マンドリン＆ギター史』
菊池清麿、彩流社 3,780 円
『ピアニストの筋肉と奏法』マリナ・フェレイラ、
八重樫克彦訳、音楽之友社、1,728 円
『平成加賀万歳』 田中久雄、北國新聞社、1,350 円
『耳の渚』 池辺晋一郎、中央公論新社、1,944 円
『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ
歌い踊ることをめぐる政治』トマス・トゥリノ、野澤豊一、西島千尋訳、水声社、6,480 円
『ミュージック　「現代音楽」をつくった作曲家たち』
ハンス・ウルリッヒ・オブリスト、篠儀直子、内山史子訳、フィルムアート社、2,808 円
『南ロシア　草原（ステップ）・古墳（クルガン）の神秘』
鴨川和子、雄山閣、4,860 円
『メディア都市』（デジタル・スタディーズ３）
石田英敬他 編、東京大学出版会、5,184 円
『メロディがひらめくとき　アーティスト 16 人に訊く作曲に必要なこと』黒田隆憲、DU BOOKS、1,944 円
『ユングのサウンドトラック　菊地成孔の映画と映画音楽の本（ディレクターズ・カット版）』（河出文庫）
菊池成孔、河出書房新社、1,188 円
『ラジオ関西 10 万枚のレコード物語
あの感動をもう一度』（のじぎく文庫）
今林清志、神戸新聞総合出版センター1,944 円
『リアル・キューバ音楽』（1 冊でわかるポケット教養シリーズ）ペドロ・バージェ他、大金とおる、吉野ゆき子訳、ヤマハミュージックメディア、1,026 円

『リアル・ブラジル音楽』（1 冊でわかるポケット教養シリーズ）　ウィリー・ヲゥーパー、ヤマハミュージックメディア 1,026 円

『リー・コニッツ　ジャズ・インプロヴァイザーの軌跡』アンディ・ハミルトン、小田中裕次訳、DU BOOKS、3,456 円

『理論・方法・分析から調性音楽を読む本』アンリ・ゴナール、藤田茂訳、音楽之友社、3,132 円

『レクイエムの名手　菊地成孔追悼文集』菊地成孔、亜紀書房、1,944 円

『レコードと暮らし』　田口史人、夏葉社、2,376 円

『わからない音楽なんてない！子どものためのコンサートを考える』大友直人他、アルテスパブリッシング、2,376 円

新発売視聴覚資料

（ゴシック体の項目は賛助会員による刊行物）

●CD

『御殿場音頭／高松小唄』菊池杜支朗他、VZCG-10560、1,296 円

『ザ・ベスト　沖縄の島唄　民謡』COCN-40064、1,944 円

『ザ・ベスト　沖縄の島唄　ポップス』COCN-40063、1,944 円

『ザ・ベスト　相撲甚句　名力士編』COCN-40072、1,944 円

『ザ・ベスト　箏　名演集』　COCN-40065、1,944 円

『ザ・ベスト　祝いのしらべ』　COCN-40075、1,944 円

『ザ・ベスト　津軽三味線名演集』COCN-40068、1,944 円

『ザ・ベスト　日本の民謡　西日本編』COCN-40062、1,944 円

『ザ・ベスト　日本の民謡　東日本編』COCN-40061、1,944 円

『ザ・ベスト　日本の盆踊り』　COCN-40022、1,944 円

『ザ・ベスト　祭り囃子　全曲集』COCN-40067、1,944 円

『ザ・ベスト　浪曲　名人さわり集』COCN-40073、1,944 円

『ザ・ベスト　大正琴　名曲集』　COCN-40074、1,944 円

『白川こだいじん／野母ちゅうろう　寺おどり』全日本民踊指導者連盟監修、COCF-17076、1,296 円

『箏と十七絃の世界』石垣清美、　COCJ-39300、3,146 円

『淡窓伝光霊流吟詠集』淡窓伝光霊流日本詩道会、COCJ-39240、2,500 円

『長峰弘風　愛銀集』長峰弘風　COCF-17050、1,200 円

『日本コロムビア吟詠音楽会創立 50 周年　初心 II』COCJ-39329、2,500 円

●DVD

『第十九回日本伝統文化振興財団賞　佐辺良和（琉球舞踊家・組踊立方）』佐辺良和他、 VZBG-51、3,780 円

●カセット

『しげさ節／米節』福浦くに子、鹿島久美子、VZSG-10640、1,296 円

『博多の四季／日向木遣り唄』栄芝、本條秀則、VZSG-10639、1,296 円

編集後記

会報 96 号をお届けいたします。東京藝術大学で開催された第 66 回大会は、発表数も多く充実した内容でした。当日会場にいらっしゃれなかった会員の皆様も、また別会場での発表が気になる方も、本号掲載の大会レポートを楽しんでいただければ幸いです。通常号以上に多くの方々に大会レポートのご執筆をお願いいたしました。ご協力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

増野亜子

会報編集委員会
理事：永原恵三、増野亜子
委員：井上登喜子
参事：大久保真利子、角優希、松本民菜、安原道子、横山洸、渡邊佐恵子

第４回定時社員総会議事録（抄）・添付書類

１．日時：平成 27 年 10 月 31 日（土）16:40～17:30

２．場所：東京藝術大学上野キャンパス第６ホール

３．出席者：324 名（出席名 68、委任状提出 143 名、
書面議決 113 名）
〔備考〕正会員 600 名、定足数 300 名

４．議事事項と審議の経過及び結果
定款第 19 条により塚原康子会長が議長となり、定足数を確認の上、開会を宣言した。次いで定款施行細則第 16 条により副議長を要請し、加藤富美子、寺内直子両氏が選出された後、以下の議事を開始した。

◇審議事項

第１号議案　平成 26（2014）年度事業報告の件
遠藤徹理事（総務担当）より「平成 26（2014）年度事業報告」【添付書類１】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第２号議案　平成 26（2014）年度収支決算の件
高松晃子理事（経理担当）より「平成 26（2014）年度収支計算書内訳表」【添付書類２】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第３号議案　平成 27（2015）年８月 31 日現在貸借対照表
および正味財産増減計算書の件
高松晃子理事により「貸借対照表内訳表」【添付書類３　１】、「貸借対照表」【添付書類３　２】、「正味財産増減計算書」【添付書類３　３】、「正味財産増減計算書内訳表」【添付書類３　４】、「附属明細書」【添付書類３　５】について説明があった。続いて、小柴はるみ監事により「監査報告書」【添付書類８】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第４号議案　2015 年８月 31 日現在会員異動状況の件
遠藤徹理事より「会員の異動状況（2014 年９．１．～2015 年８．31）」【添付書類４】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第５号議案　定款施行細則の変更の件
遠藤徹理事より「平成 27（2015）年定款施行細則の変更条目」【添付資料５】について説明があった。議長がこの承認を議場に諮ったところ、絶対多数（書面による原案賛成を含む）の賛成を得て可決承認された。

第６号議案 その他
議長が議場に対して発議を促したが、その他の議案は出されなかった。

その後、遠藤徹理事（総務担当）が「平成 27 年度（2015）事業計画」【添付書類６】について、高松晃子理事（経理担当）が「平成 27（2015）年度収支予算書」【添付資料７】についてそれぞれ報告を行った。その他、音楽文献目録委員会の近藤静乃委員から RILM の紙媒体からウェブ閲覧への移行について、2016 年度より定期購読者向けにパスワードを配布し、ウェブ上で試験運用を開始するという報告があった。

［第４回定時社員総会　添付資料１　１］

平成 26（2014）年度事業報告

（自平成26年（2014年）9月1日 至平成27年（2015年）8月31日）

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催（定款第５条１）

（1）公開講演会の実施（定款施行細則第３条１）

・日時 2014 年 11 月 22 日

・会場 四天王寺大学羽曳野キャンパス

・課題「四天王寺の聖霊会について」（講演、ラウンドテーブル、公演）

（2）研究発表大会の実施（定款施行細則第３条２）

・日時 2014 年 11 月 23 日

・会場 四天王寺大学 藤井寺駅前キャンパス

・発表件数 20 件（パネルディスカッションを含む）

（3）次年度大会の準備

・日時 2015 年 10 月 31 日、11 月 1 日

・会場 東京藝術大学

（4）定例研究会（定款施行細則第３条３）

○東日本支部

・回数 7回（第81回～第87回 12・２・３・４・５・６・７月）

・会場 東京藝術大学ほか

・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表、特別企画

○西日本支部

・回数 3回（第 266 回～第 268 回 11・５・８月）

・会場 国立民族学博物館ほか

・内容 講演と討論、修士論文、小泉文夫音楽賞受賞記念講演、映像上映と討論

○沖縄支部

・回数 3回（第 62 回～第 64 回　９・１・５月）

・会場 沖縄県立芸術大学

・内容 レクチャーコンサート、ミニ・シンポジウム、博士論文発表

〔2〕学会誌および学術図書の刊行（定款第５条２）

（5）機関誌『東洋音楽研究』の刊行（定款施行細則第３条４）

○第 80 号の編集、刊行

・内容 会員の論文、資料、書評ほか

（6）会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

・第 92 号（2014 年９月）、第 93 号（2015 年１月）、第 94 号（2015 年５月）

・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、 図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

・第 36 号（2014 年 11 月）、第 37 号（2015 年３月）、第 38 号（2015 年６月）

・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

・第 79 号（2014 年９月）、第 80 号（2015 年５月）

・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』

なし

〔3〕関連学協会との連絡および協力（定款第５条３）

（7）日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

（8）音楽文献目録委員会への参加

○会員三名を委員として派遣

（9）国際伝統音楽学会（ICTM）への協力

○日本国内委員会として加盟

(10)藝術学関連学会連合への参加

○会員一名を委員として派遣

〔4〕研究の奨励および研究業績の表彰（定款第５条４）

(11)「田邉尚雄賞」（定款施行細則第３条５）

○第 31 回田邉尚雄賞の授賞

・日時 2014 年 11 月 22 日

・受賞者および授賞対象

梶丸　岳『山歌の民族誌　　歌で詞藻を交わす』

2013 年３月 31 日発行、京都：京都大学学術出版会、

ISBN978-4876982707

○第 32 回田邉尚雄賞の選考と発表

塚田　健一『アフリカ音楽学の挑戦　　伝統と変容の音楽民族誌』

2014 年２月 28 日発行、京都：世界思想社、ISBN978-4790716174

〔5〕研究および調査（定款第５条５）

(12)国内または国外における学術調査および研究

とくになし

〔6〕その他目的を達成するために必要な事項（定款第５条６）

(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14)独立行政法人科学技術振興機構（JST）電子アーカイブ事業への参加

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

［第４回定時社員総会　添付資料６］

平成27年度（2015年度）事業計画

（自平成27年（2015年）９月１日 至平成28年（2016年）８月31日）

〔１〕研究発表会および学術講演会の開催（定款第５条１）

（１）公開講演会の実施（定款施行細則第３条１）

・日時 2015年10月31日

・会場 東京藝術大学

・課題「大学における世界音楽の実践」

（２）研究発表大会の実施（定款施行細則第３条２）

・日時 2015年11月１日

・会場 東京藝術大学

（３）次年度大会の準備

・日時 2016年10月または11月

・会場 東京周辺予定

（４）定例研究会（定款施行細則第３条３）

○東日本支部

・回数 ６回（第88回～第93回 12・２・３・４・６・７月）

・会場 東京藝術大学ほか

・内容 研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

○西日本支部

・回数 ４回（第270回～第273回 12・２・５・７月）

・会場　国立民族学博物館ほか

・内容 研究発表、記念講演、修士論文・博士論文発表ほか

○沖縄支部

・回数 ３回（第66回～第68回 12・３・７月）

・会場 沖縄県立芸術大学

・内容 研究発表ほか

〔２〕学会誌および学術図書の刊行（定款第５条２）

（５）機関誌『東洋音楽研究』の刊行（定款施行細則第３条４）

○第81号の編集、刊行

・内容 会員の論文、研究ノート、資料紹介、書評ほか

（６）会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

・第95号（2015年９月）、第96号（2016年１月）、第97号（2016年５月）

・ 内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、大会開催案内、大会レポート、図書・視聴覚資料紹介、会員消息

○『東日本支部だより』

・第39号（2015年11月）、第40号（2016年３月）、第41号（2016年６月）

・内容 東日本支部定例研究会の開催案内・報告、会員の声ほか

○『西日本支部だより』

・ 第82号（2015年９月）、第83号（2016年１月）、第84号（2016年４月）

・内容 西日本支部定例研究会の開催案内・報告、支部会員への諸通知ほか

○『沖縄支部通信』

・ 第37号（2016年１月）、第38号（2016年７月）

・内容 沖縄支部定例研究会の開催案内・報告

〔３〕関連学協会との連絡および協力（定款第５条３）

（７）日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

（８）音楽文献目録委員会への参加

○会員三名を委員として派遣

（９）国際伝統音楽学会（ICTM）への協力

○日本国内委員会として加盟

(10)藝術学関連学会連合への参加

○会員一名を委員として派遣

〔４〕研究の奨励および研究業績の表彰（定款第５条４）

(11)「田邉尚雄賞」（定款施行細則第３条５）

○第32回田邉尚雄賞の授賞

・日時 2015年10月31日

・受賞者および授賞対象

塚田　健一『アフリカ音楽学の挑戦　　伝統と変容の音楽民族誌』2014年２月28日発行、京都：世界思想社、ISBN978-4790716174

○第33回田邉尚雄賞の選考と発表

（2016年４月予定）

〔５〕研究および調査（定款第５条５）

(12)国内または国外における学術調査および研究

とくになし

〔６〕その他目的を達成するために必要な事項（定款第５条６）

(13)東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(14)独立行政法人科学技術振興機構（JST）電子アーカイブ事業への参加

総会添付資料の一部は、個人情報保護等のため削除しました。

［第４回定時社員総会　添付書類８］

監　査　報　告　書

一般社団法人 東洋音楽学会

会長　塚原 康子 殿

平成 27 年 9 月 29 日

(2015 年)

監 事　小柴はるみ

監 事　蒲生 美津子

私たちは、平成 26 年 9 月 1 日から平成 27 年 8 月 31 日までの平成 26 年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1．監査の方法の概要

(1)　会計監査について、会計帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて財務諸表等の正確性を検討した。

(2)　業務監査について、理事会及びその他の会議に出席し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて業務執行の妥当性を検討した。

2．監査意見

(1)　平成 26 年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録並びに収支計算書は会計帳簿の記載金額と一致し、法人の財産状態及び収支状況を正しく表示していると認める。

(2)　事業報告書の内容は真実であると認める。

(3)　公益目的支出計画実施報告書に関して監査を行った結果、正しく実施されていることを認める。

(4)　理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事項はないと認める。

以上